内的葛藤を失った現代青年
――臨床事例からの理解――

田　村　敏　昭
東亜大学　総合人間・文化学部　心理学研究室
E-mail: tamura@po.cc.toua-u.ac.jp

1．はじめに

「こころの時代」と言われて久しい。身近にも不登校・ひきこもり・うつ病・摂食障害などの話題に事欠かず、その対処に追われている。しかしこれら「こころ病む人」たちの間で近年質的な変化が起こっている。個人がその内的葛藤を持って自己の変容をこころざし「悩んで」いたのが従来型とすれば、悩みを部分化し、あるいは他者に責任を求め、そして「考え悩むよりは行動」に走って問題化する傾向が近年増えているのである。問題行動への対処に追われ、従来のような言葉を使った内省期待型のカウンセリングが成り立ちにくくなったという声は、思春期をめぐる病院や学校場面でしばしば聞かれることである。筆者自身も、同様な臨床経験をしてきている。

一方、少年犯罪においてもその性質が衝動化・低年齢化・残虐化していることへの論議が喧しい。1990年の青少年白書ではゲーム型犯罪の要因の一つとして「内面の幼児性や自己中心性の肥大化」を挙げ、1997年に警察庁は増加する少年凶悪犯罪に対して、それが衝動的であることから「いきなり型犯罪」と命名した。

清永は少年非行の研究から、現代の少年達の世代には「自己感覚（自己がどうあるべきか、自己抑制、自尊感情など）、「他者感覚（他者への想像力、共感・受容性）」、「社会的規範軸（善悪のものさし・社会的統制）」の重要な三つが欠落しているとして「空洞の世代」と名づけている。さらに「その後にはなにも問題が生じないことが問題と言える時代が来るかもしれない。目標がなく、自分の怒りや欲望を衝動的に解決してくれる人やものなら何でも構わない、という思考停止ともいうべき無規範な感覚が、21世紀を支える人々の意思決定基準になっているかもしれない」と述べている（清永1998）。少年犯罪においても「悩んだ末の犯行」ではなくなってきているのである。

犯罪を精神医学や臨床心理学から理解しようとする試みから、精神鑑定が行われることも話題を呼んでいる。しかしこれらの専門家からマスメディアによってコメントが流布されることには批判も多い。例えば「引きこもり」＝精神異常者に近く犯罪予備軍であるとの社会通年が近年連続した事件によって形成されてしまったように見えることなどである。また例えば迷惑行為や覗き見など従来であれば軽犯罪で済んだケースが、精神科受診を警察や被害者から強要されることも見られる。こうして犯罪を「こころの病気」と関連づけることも近年目立っている。理解の範囲を越えた事件を精神医学や臨床心理学の知見を得て社会の中に何とか位置づけようとの試みであろうが、新たなレッテル張りと排除につながる恐れも指摘されている。

精神鑑定がこれらの事件でなされる風潮について、間宮は「精神鑑定をめぐる被告のきわめて個人的な精神・心理状態のあり方に全てを閉じ込めて、それが犯罪の本質を代弁してくれるかの錯覚を持ってしまった。法律上の事実認定が終われば、後は個人の内面の問題だけになる

東亜大学　総合人間・文化学部『総合人間科学』第4巻，2004年3月，pp. 17-26

のであろうか。」と現代犯罪に対して社会文化的次元からのアプローチの必要を訴える立場から異議を唱えている（間宮充幸 1997）。

小田は事例が持つ意味を、

CN（caseness 事例性）＝f（i《illness：疾病性》，t《tolerance：社会の耐容度》）

として社会の中で精神障害や「心の病気」が析出されていく過程を関数関係にあるとした（小田 1986）。

心的不適応や犯罪で個人の疾病性や社会の耐容度はいかなる変化を見せているのであろうか。またそれは「悩むことをしなくなった」、つまり内的葛藤を失った事例の性質の変容とどう関連するのであろうか。

2．目的

臨床心理学は実験や理論ではなく、心的不適応者との実際の関わりを基礎領域とする。近年の臨床事例で自身の問題についてうまく言語化できない、またそもそも自己をそのように吟味する姿勢に欠け、内的葛藤を持たない傾向は、心的不適応者の変質を物語るものであり、同時に治療スタイルや社会の側に構えの変革を迫るものかもしれない。

筆者は精神科の臨床心理士として、また学校現場でのスクールカウンセラーとしてフィールドを持っている。本稿では最近の臨床事例を提示して、それを心理力動論の立場からまず論じる。次いで本論の主題である、クライエントの内的葛藤の弱さについて、現代の社会文化的視点からの様々な論を紹介し、「悩めるはずの」個人と現代の社会環境との関係について論じて彼らの理解の一つとして寄与したい。

3．事例呈示

事例①“怠学”が疑われた不登校中学生

中学生男子。人前に出ると「身体がおかしくなる」との訴えで登校を渋り、保健室登校を辛うじて維持していたが、これが元々興奮し易い性質が知られていた父親の知るところとなり、本生徒に武道の習い事を強制したり暴力も振るい、「学校でいじめられているのではないか、学校の対応が悪い」と学校や生徒の級友の家に怒鳴り込むなどし、かえって事態を混乱させてしまっていた。カウンセラーが母親に関わり、この父親の人格に配慮しつつ、問題に父親として参加するよう働きかけることを勧めた。それまで断絶していた夫婦間の話し合いが久し振りに出来たのか、父親は我が子の不登校を確認した上で学校に出向いて謝り、学校周辺にいる本生徒を探し出して抱きしめたと言う。さらに父親はかつて自分も不登校児であったことを聞かれもしないのに学校で告白した。

学校関係者はこの父親の変貌ぶりに驚き、次の展開と解決を期待した。しかし父親の「理解」を軟化として受け取った本生徒はいよいよ不登校の度を強めてしまい、校外での別の遊びに“生き生きとして”参加するようになってしまった。それを目撃した教員達は「これは不登校ではない。不登校児はもっと青白い顔をして悩んでいるものだ。これは怠学ではないか」との感想を口にし合った。

――不登校はかつて深刻な苦悩を本人と周囲に与えたが、いまや文部科学省が不登校を「誰にでも起こり得る」として認める姿勢を打ち出してきて以来、不登校も人生上の選択肢の一つとさえ「理解」されるようになった。こうして周囲――この事例の場合、怖かったはずの父親――の許容を得て子供が登校をめぐる葛藤に追いこまれないことがある。

上林はこのような場合に、従来言われてきた不登校の初期の心気的段階、攻撃的段階を速やかに通過してしまい、こうした「明るい不登校」が学校関係者からは怠学と見なされ易いことを指摘している（上林 1990）。

本事例での次の特徴は何より当初強面と見えた父親が腰砕けになったことである。その後の本生徒の遊びへの逃避ぶりを見ると、この父親の弱さを初めから見透かしていたのではないかとも思えるほどである。カリカチュアのように様々な父親像を演じて見せることは、体現し伝達すべき価値観のなさを露呈しているとも言え

よう。父親の中年期に際しての自暴自棄さが現れているとも理解される。

この父親は自営業を失敗した後、転職を繰り返しており、社会的には弱者であった。このことはわが国の1990年代、いわゆるバブル崩壊後の経済界の状況と無縁ではないと思われる。終身雇用の習慣が崩れてリストラが蔓延し、働く人間にとってそれまでは終生拠るべき所であった会社という組織が覚束なくなった。又競争が激化して「勝ち組、負け組」という言葉が臆面もなく言われるようになった。流動する雇用状況の中で学歴や会社組織が信頼に足りるものでないことは誰の目にも明らかになったと言えよう。

この父親も自らの体験からも息子たる本生徒に登校を強要する力と信念を持ち得なかったのではあるまいか。そして学校や級友宅へ怒鳴り込んだ行動にも、背後に余裕のない被害者意識が窺われる。さらに我が子を一転して抱きしめたとは、強い父親像とは裏腹に子どもとの心理的距離の過剰な近さすら窺えるのである。

筆者はスクールカウンセラーとしていくつか高校を経験した。スクールカウンセラー派遣を希望する高校は、学力面でいわゆる「底辺校」が多い。そこには「問題」が多いからであるが、その背景の多くは、学校を中心にするならば勉学への目的意識や希望のなさに関連したものであった。今やわが国の高校への進学率は90%を越えるが、その実態の一部がこうした形で問題化していると思われた。

学歴・会社、そしてその獲得のための、例えば忍耐や努力という価値観はかつての強さをとっくに失っている。それにいち早く気がついているのは子供達である。葛藤はそもそも二つの価値観のせめぎ合いであるが、本事例では間近なこの父親をモデルとして、学校がビジョンとして提供する将来やそのための努力の価値を認めていないのが実態であろう。諦めてしまっているのである。そして片や「登校できないことで当人が悩んでいるはず」として理解しようとする教員・学校は、勉学や向上という旧来の価値に信を置いている組織であり、この両者によるずれが先の認識違いの問題を生んでいるとも理解されるのである。

千石は日本の中学生に、アメリカ・中国との比較の上で、友情・大義などの価値観がなく、例えばいじめがあってもそれを止めるリーダーシップを取ろうとする人物や、それを支える価値観がなく、「軽躁的な明るさ志向という妖怪が教室にいる」とした（千石　保 1986)。明るさ志向だけでは、そうなれない生徒にとっては、学校という集団場面は容易に苦痛の場と化すだろう。中学生がこの年で毎日登校して集団場面を経験するという意味をもう一度考え直すことが必要であろう。例え勉学で諦めても他の才能や、何より対人関係が花開くのがこの時期であるのだから。そしてその対人関係の質とは、互いの個の相対的な関係性に目覚めることが期待される。これからの時代、大組織に所属して安寧を得るのではなく、個人は個人として立つしかないからであるが、発達的にも中学時代は自己と他者の違いに目覚める時期である。この両者が重なって、中学生は表面はともかく、大きな不安を潜在的に持ちやすい。しかしそこでこそ、中学生が他者との集団場面を経験できる学校という場は意味を持って問い直されるべきである。

事例②「いじめられ」を演じた女子高校生

高校の女子生徒が突然に出会い系サイトで知り合った男性を頼って遠方へ出奔した。そして出奔先から担任に「自分はいじめられている。相手の4人を退学処分にして欲しい。さもなければ自殺します」と連絡をよこした。これが複数回に及び、担任の説得にも意思を変えなかった。いじめによる生徒の自殺が世間の関心を最も集めていた時期でもあり、学校側は対応に苦慮した。ようやく帰省してきた生徒はスクールカウンセラーに対して当初拒否的であったが、スクールカウンセラーはそれまでの生徒の手紙から、思春期性の友人を巡る葛藤が病的に増幅されていると判断しており、その見立ての元で呼びかけを行い、カウンセリングに導入することが出来た。担任の受容的な態度もあいまっ

て、その後本生徒の他罰行動は終息した。

前後して本生徒から名指しされた生徒に個別面談して分かった全貌は、むしろ中学までは本生徒の方がいじめ側であり、高校入学後から部活などで次第に他生徒の方が仲間を作り才能を花開かせていく中で孤立感を深めたことが背景にあったと理解された。しかしその表現の仕方としては、クラスの皆のいる前で相手の一人につかつかと歩み寄り、いきなり頬を叩いてわっと泣き出して去るなど、一見自分の方が訳ありの被害者の如くに振る舞っていた。家庭環境も暴力を振るう父親、暗く神経症的な母親などがあり、明るい他生徒グループに絶望的な羨望を向けていたことが推測された。

この事例での病理性は、級友との軋轢が自己の扱われ方への関心に過剰な収斂を見せており、それが他罰的な思考と派手なパフォーマンス性を持っていることが特徴と思われる。自己愛（ナルシシズム）の病理とも関連すると思われた。

山田は大学キャンパスを舞台にした現代青年の精神保健上の問題として、攻撃性・他罰性を持った幼稚な行動化が突出する群、仲間との食事や雑談など親密な交流が出来ないふれあい恐怖、不安状況などで単発的に生じるサブクリニカルなむちゃ食い、部分あるいは生活全般に渡るアパシー（無気力症）等の例を挙げ、「普通の」青少年が内面でなく行動面で病理化する現象が増えていることを「サブクリニカルな問題性格群」と呼んでおり、こうした水準の性格形成不全は境界例の病理にも連続する」としている（山田和夫 1989)。

境界例とは人格障害の一つで、耐えがたい孤独感に苛まれ、自傷など様々な衝動的行為を繰り返して周囲を振りまわす、いわば精神病と神経症の中間状態を指す概念である。1980 年にアメリカ精神医学会の診断と統計のためのマニュアル（DSM-Ⅲ）で初めて正式な「疾患名」として記載されたが日本でもこの症例の報告が確実に増え、それが現代の家庭・社会のありようを逆に照射することから境界例は「現代病」とさえ言われている（笠原　嘉 1983)。

境界例概念の中で比較的健常者ともオーバーラップする病理が自己愛の病理と言われている。コフートは自己愛人格者の病理として、対人関係で自己の誇大性の確認を求めて他者を従属させようとする側面と、他者を理想化してその一部になろうとする側面があって人格の統合を失っており、他者との間で対等で現実的な関係が成立しないことを論じた。また自己愛のもう一つの病理的表れとして、他者から軽視や批判を受けたと思いこむ場面では、過敏な自己意識ゆえに自己愛性憤怒が突出する場面があるとした（H,Kohut 1971)。この事例でのクラスメイトへの報復感情を含んだ強い怒りも、その動因は自己の扱われ方を巡ってのものであった。また、同種の心性は最近の事件で見られる、自己の扱われ方をめぐって容易に「キレる」青少年の例もこの自己愛性憤怒の面から理解されるかもしれない。

また自己の（誇大性の）確認 を他者に迫るとは、裏返すと少なくとも主観的には他者に認められていない悲哀感を有しているとも言える。この事例では世間での学校問題でのマスコミの取り上げ方を利用してしまったのか、被害者を装うことで自らの問題のすり替えをしてしまったと理解されるが、深層的にはすり替えではないのかもしれない。そしてそのことに気付くならば別のもっと深刻な苦悶が彼女を襲うと思われた。

事例③　視線恐怖症が治癒後引きこもり・万引き行動が見られた青年

中学時より視線恐怖症を発し、各地の治療機関を転々とした後高校も退学した。18 歳時「自己が消滅する不安」を訴えて精神科に入院したが、拗ねた態度で主治医になつかなかった。訪室を重ねたカウンセラーが関わりを持つことが出来、カウンセラーの一挙一動を自分に対する態度として過敏であったが、以後 13 年間同じカウンセラーの元へ通院している。退院後僅かなアルバイトと自動車学校の経験はあるがその他の進路の企ては全て続かない。家庭は父親が会社の経理に手をつけて首になり、その

後も水商売でに失敗して遠方におり、その後死亡。本人の同一化の対象にはなり得なかったようである。母親もそんな父親に見切りをつけてか早くから愛人を作り、父親の死去後は愛人と再婚、本人には仕送りを続けている。その経済支援に安住出来ているためか、本人は無職のまま単身生活で、インターネット内でのチャットで汚言を書きこんだりして時間を潰しているという事実上引きこもり状態であった。症状は一段落し住居が遠方になったためカウンセリングは2ヶ月に一度となったがこれのみが「人と話す時間」となっていた。

患者の年齢が30歳を越えて万引き行動が出現した。万引きした品をインターネット内でオークションに掛けて小遣いを稼いでいるというが、切実さに乏しく罪悪感が全く見られないことに驚いたカウンセラーが強く諌めても意に介さず、さらに以前カウンセラーに同一化して臨床心理学の勉強をした時期があるせいか、「内的倫理観の喪失〜」とうそぶいた。

——この事例は家族実在の元で父への軽蔑、自分を可愛がってくれた母が愛人を作っていることへの不信、自分に暴力を振るったことがある兄への屈曲した思いという葛藤下で、思春期にそれまで培われていた「か細いが特別な自己」像が破壊される不安を生じ、視線・対人恐怖という症状を形成していたと思われていた。それは十分に心理学的な意味を持っていた。しかし社会参加に失敗する過程と平行して家族を一人ずつ失い、葛藤源が薄められてしまったという背景がある。母親からの仕送りという経済保証だけはある状況で、心理的には見捨てられているという問題もある。「特別な自己」＝自己愛の保証がカウンセラーとの間でだけ起こり、（幻想であるが）自分を全面的に受け入れてくれるカウンセラーには同一化するが、社会の顔をして説教すると思える同じカウンセラーには無視しようとするのである。

こと万引きに関しては、それに罪悪感を持たぬことは本患者に限らない現代の青少年に少なからず蔓延している風潮としてしばしば問題にされる。またそのスリルと社会への挑戦性ゆえに、思春期を迎えた少年の同級生へ自らの大胆さを証明するイニシエーションとしての意味に触れる論も見られる。ただ本患者は既に30歳を越えている。

先に挙げたコフートは自己愛者が自己イメージを周囲の共感不全によって破壊された場合には「自己の断片化」を起こし、その場合は「慢性的に低い精力的状態で、人生を空虚なものと感じさせ、人間的出会いの願望があるにもかかわらず、こうした出会いに抵抗し、意識的に傲慢と孤独の態度を取り続ける。時には様々な活動を通して自信を得ようとする。それは異性愛、薬物、盗みなどによってその空虚さから逃れようとする」と言う。

影山は現代の犯罪について例えばストーカーなど、相手との関係性において自己を確認することが目的と思われる事件が増えて、それは従来の犯罪動機説だけからは理解されにくいことを述べて、これらを「自己確認型犯罪」と名づけている（影山任佐 2000）。

この事例も30歳を越えて、何ら実質を持たない自己のあり方に、思春期時代の対人恐怖とは質の違った底知れぬ空虚感と不安を有してきたのではあるまいか。またこうした話題をカウンセリング場面で持ち出すことも、せめてこうした形・行為をしている自己の姿をカウンセラーに見せて、その反応を得て合わせて（その場だけの）自己像を形成する、という面があると思われた。

本事例は単身生活となった後は事実上の引きこもり生活となったが、一人でその場にいない母親と幼児語で対話するなど幻想的な一体感を有していた。先の山田はアパシーについて、「父を軽視し見限った母が代りに期待に応えられそうな子を選んで取り込む。その強化された母子連合・癒着を弱い父親が切断できないために、葛藤や抑圧を生じず、『悩みを悩めないプレエディパール（母を巡る父親との葛藤以前）な状況』にある、としている（山田和夫 1989）。

本事例の13年間を追ってみると当初は確かに葛藤を曲りなりにも有していたものが、次第

にこうした深い病理を露呈すようになった感がある。例えば初診時は中学生であった本事例の心理検査データを見ると、YG性格検査はE型、つまり神経症で典型的に見られるプロフィールである。その強い「抑うつ感」尺度得点などは、少なくとも葛藤とその苦悶を逃避しているものではない。

そして13年前にはまだ存在していた彼の家族（と、その葛藤)、そして13年前にはまだ持ち得なかったインターネットなどを考え合わせると、人格病理だけでで長年の経過を説明することの難しさを覚える。彼のひ弱な人格もまた、時代の流れに負の形で巻き込まれ、病理を深めたと言えるかもしれないのである。

4．考察

4.1　内的葛藤の歴史と喪失

フロイトはヒステリー患者の原因を性的記憶の抑圧にあるとし、それを寝椅子に横たわっての連想という方法によって外に表現することを試みた。個人の中に当然社会規範を取り入れた部分（超自我）があり、それと抑圧せねばならぬ自らの欲動との内的葛藤が症状を形成しているとしたのである。自由連想が滞るようであれば、その障壁となっているものに意味があるとして抵抗分析の必要が説かれ、連想されたものには解釈を与えて、その意味を得て自我が自己を統制することを理想とした。こうした過程を経て、自己の内界をよどみなく自由連想できること（この時の感情を「オーシャンフィーリング（大洋感情)」と呼んだ）が個人をその抑圧から解放し、神経症の治癒に繋がるとフロイトは考えたのである。

この考え方は19世紀末の西欧社会において市民社会の成熟が急であったにせよ、まだ社会に厳然と階層や秩序があったことを背景にしている。個人は自分の心中の全てを表現することは許されず、個人の側を周囲や社会に合わせて変容させるしかなかったのである。

わが国でも従来、神経症では特に森田療法や内観療法など日本の仏教文化・思想に深く根ざしたものではやや保守的とも思える現実肯定があり、変容するべきは自己の側とされていた。例えば森田療法者では以下のような記述も見られる。「神経質者も亦自己の苦痛不安を父母の教育のせいにするとか、或は遺伝のせいにするとか、又は現在の職業の不適のためであるとしている間は、症状も好転しない」。世間は乗り越えることの出来ない壁であり、それが個人を苦しめ、内的葛藤が生まれたのである。

しかし成熟社会と言われる現代では、社会文化の基底を成す価値観も拡散している。「何でもあり」と形容される今日、従う、あるいは戦うべき対象が家族内にも社会にも見つからないという事態が発生していると言える。これが思春期や事例化した例では彼らの考え方を方向付ける際に周囲や社会が許容的で規範や準拠枠を提供しないという結果になっているように思われる。

4.2　情報社会と自己の分裂

圧倒的な情報量が行き交う現代社会では、情報を得る作業が情報機器に依存できることは現実感覚をいっそう失い、架空の現実や対人関係に容易に耽溺しやすいことが挙げられる。事例③のように、引きこもっていながら実はインターネットという世界では「対人関係」が出来ている。ただしそれは顔の見えない、一方的に言いっぱなしのできる、つまり自己中心であってもその責任を取る必要のない閉じられた世界である。現実感覚、特に「死」や「他者」についての想像力の欠如の問題は、多くのゲーム型犯罪や公の場面での大衆のマナーの乱れについても言われている。事例③の場合、元々自己像に歪みがあって、他者との緊張関係を生じていた場合、インターネットの世界では第2の現実を得ることになる。その中では現実世界での自己の惨めさ感覚や身体感覚が逆転されている可能性がある。情報機器への耽溺は現実世界での自己さえも相対化され、彼らの苦しみを和らげているかもしれない。しかしそれは「いつまでも夢見る青年」という側面を強化し、現実の時の流れや、大切な現実の自己感覚というものを

失なうのではなかろうか。

また事例②の女子高校生が携帯電話のサイトで知っただけの他人と即座に親密な関係になったり、マスコミで騒がれる方式を模倣したこととも関連するだろう。個人の感性や考え方など人格の構成を見る時、現代ではこの情報機器と交流することからの多大な影響を考慮に入れないわけにはいかない。

情報社会で我々は多くの情報にアクセスはするが、それに付随するはずの感情を切り捨てて生活している。感情をそのたび生起させていたのでは人格上の分裂感覚に襲われるだろう。選択に当たって「あれか、これか」という二者択一の迷い方ではなく、「それはそれ、これはこれ」という分割した構えをかなりの程度取らざるを得ない。こうした態度は精神医学の領域では既に1942年にドイッチェが「as if personality = かのような人格」として記載した、その場その場ごとに人格を合わせていくスタイルであり、またその病的なレベルでは元々ego splittingとして統合失調症（精神分裂病）や境界例、解離性障害で知られていたものである。幼児では不快刺激から健康な自我の部分を守るために、と説明された。ちょうどコンピューターで言えば安全と整理の為にソフトや保存先を分けて機能することであるが、もちろん相互の連絡や全体の統合性は犠牲にされる。現代人では程度の差こそあれ、態度としては一般的になりつつあると言えないだろうか。

このことは当然に不快体験を都合よく避けることにもつながり、その忍耐性も弱いという結果を引き起こすだろう。多量な情報を処理するということは、常に現在に照準が合わされることであるが、それは人格の連続性の欠如感をもたらすはずである。内的一貫性よりも外との連絡とその度の適応に重点が移される結果となる。

かつてリースマンは都市化の中で個人が役割上の仲間と偽りの関係を結ぶことを余儀なくされ、他者志向を強いられながらも相互に孤独であることを説いた（D, Riesman 1950)。現代ではリースマンが描いた「他者志向」が「情報という記号志向」に置き換っているのではなかろうか。しかも情報機器は各家庭・各個人に行き渡っており、人はその必要から情報と「偽りの関係を結び、疎外感を持ちやすい」と同時に、一方では恣意的に選択した情報という代理世界に耽溺する道も用意されている。それは自己愛的な世界を作るようになると思われる。

4.3 自己愛

米国の論者ラッシュは米国社会を「ナルシシズム社会」として、米国市民全体への自己愛心性の蔓延について言及している。資本主義のあり方の所産として、人は物を自分の手で作り出すのではなくて人との関係で働くようになる。それは役割に過ぎず芝居である。家族は生産の主体でなくなるので両親の権威が失墜するのは当然である。こうした条件下で子供は確たる躾を受けることを失い、しかもマスメディアが人々の幼児的な願望や空想を刺激し続ける中で、全能感の幻想を持ちつづけて成長する。そしてメディアのもたらすイメージの洪水が人々から生体験としての現実の価値を奪ってしまう。未来への展望を持っていない社会は次の世代の欲求に注意を払わない。家族の中で両親は次の世代に伝えようとするものが少なく、両親自身も自分たちの自己満足に第一の優先権を置いているから子供に対する働きかけが疎遠になる。そして子供には愛してもらいたいと思っている。こうした親の冷たさを見ぬいている子供が自己愛的態度を身につけていく、と言う(Lasch, R. N 1979)。

ラッシュのこの論は実はコフートの自己愛理論を下敷きにしている。コフートは自己愛人格者では自己イメージの保持に汲々としており、その結果、低い自己評価、内的な空虚感や孤立感を持ち、心気傾向などが見られるという。彼等は他者への敏感さと渇望を抱えたままで外界現実に自分を合わせなければならない。従ってそれは人格内の葛藤ではなく自己対（いきなり）外界現実との相克となっているとして、コフートはこれを「悲劇型人間」=「今の人」と呼んだ。そして「これまでの人」とは（米国で

1940年生まれまでの人）自他の境界を持った個人同士が緊密な関係を築き、フロイトが描いたような人格内の葛藤に苦しむタイプであり、これを「罪業型人間」として対比させている。

コフートは現代社会の変貌が子供に対する情緒的関わりの減少や、共感的応答の失敗を生み、こうした自己愛の障害を結果し、人の心理学的主題が変わってしまった、とした。子供は野心と理想の両極の間を周囲の共感的応答をその都度得ることによって成長するものであるが、現代の米国社会ではこうした環境が用意しにくいというのである。この立場からは（誇大な）自己イメージの保持欲求から周囲が彼らの逆鱗に触れる時の反応を「自己愛性憤怒」として理解されることは先の事例②で述べた。また内的な空虚感から犯罪など特異な行動に走ったと理解されることは事例③で述べた。

4.4 快楽追求社会と葛藤の喪失

多量の情報と共に、現代人は欲求については細分化、スピード化されて満たされる部分が多い。その内容も、家庭そのものであった食事・掃除・洗濯機能なども次々とアウトソーシング（外注）されて留まることを知らないように見える。

松木は精神分析的精神療法を適用しようとする際の現代に見られる病態の変化として、アンビバレント（両価葛藤）からアボイダント（回避）と題し、従来の神経症のように内的葛藤を保持することがなくなり、悩まず行動で発散処理する、あるいはひきこもるという制止、一方で快感充足行動を取るなど病態が変化し、パーソナリティ障害へと移っていることを挙げている。その理由として、現代社会が快感追求の社会と化しており、かつての現実原則や辛抱という価値が後退してしまっていること、現実感覚さえも映像・ゲームなどバーチャルなもので置きかえられ、やはり快感原則のものになってしまっていることを述べている(松木邦裕 1998)。

マスローは人は生理・安全欲求などが満たされると次第に承認・自己実現など高次の欲求へ移っていくという、欲求階層説を唱えた。しかし少年非行研究の立場から安香は、例えば「技術の制覇」が文化変動の進行を加速化するなど現代の社会文化的背景を挙げている。そしてそれが個人に与える影響として、人間の欲求体系が将来に対する展望の閉塞という社会状況下で、構築性のあるものから逆に生理的次元のものに退行させる、としている(安香　宏 1990)。

かつてフロイトが神経症者の治療を通して夢見た「自我による自己の制御」は「エス（無意識の欲動の中心）のある所に自我（という統制装置）をあらしめる」ことであったが、快楽が優先して消費されるこの時代にあっては、「自我のある所にエスをあらしめる」結果になっているとも言えよう。

人は欲求阻止体験を抱え込むことから解放されつつある。しかし苦悩場面を体験しないで済むということは当然その時発動される自我の防衛・工夫などの鍛錬をしないことに通じる。人は言葉を使って考えることで世界を内的に再構成すると言われるが、欲求満足や快感が保証される社会では、個人はそうした作業負担を免れる。人格はその構成を拡散させたままでも生存できる方向に向かっており、人は欲求とその満足というパターンを得ているうちは良いが、そうでない時には著しく脆弱な反応を見せる、「考えない」存在になっていくことが懸念されるのである。

事実、対人関係だけはこうした欲求－満足という即物性を欠いている（人をモノ化した際には成立するが)。現代人に残された難物がコフートの言うように周囲の人間との関係性に悩むことであるかもしれず、またそれも情報機器の助けによって容易に自己完結的な引きこもりへの道が用意されていると言えよう。

5．終わりに

葛藤は人格成長に必要なものであり、ストレスがかえって心身を鍛えるものであることは古来言われてきた。近代の文学では教養小説というジャンルも生まれた。そこでは青年が成長過程で遭遇する様々な体験とそのことからの学び

が描かれていた。ロマン・ロランの「ベートーベンの生涯」は「苦悩を経て喜びへ」がテーマである。しかしこれこそがコフートに言わせると「過去の人間」スタイルなのである。上述の影山は村上春樹の小説「ノルウェーの森」を挙げて現代人の心性である「空虚な自己」の表れとしている（影山任佐 1999)。村上の作品が欧米で翻訳されて人気があるというのも、近代国共通の心性が共感を呼ぶのかもしれない。

何かを成さずとも安楽に生きていける社会、その代わり絶えず欲望を刺激され、情報の処理に敏速であることを要求される社会を我々はこの世に現出させてしまったかに見える。しかしどれほど社会が豊かになろうとも、例えば仏教で言う生・老・病・死の宿命の苦しみから人間は免れることは出来ない。ナルシシズム（自己愛）病理の悲劇性に見られるように、他者の評価・賞賛に依存する限り「地獄とは他人のこと」となる。またいかに脱工業化し高度消費社会の快適さを傍受するようになろうとも、そのシステムを根底で維持するためには元の生産作業は必要であり、そこでは旧来の価値であるまじめさが要求される。現代ではこうした矛盾が最大限に拡大されてしまっているかに見える。

森山はかつては神経症対象であった精神療法が、昨今はカウンセリングやセラピーと呼ばれ、健常者にも心の間隙を生めるものとしてブームになっていることについて、「それは地縁共同体の崩壊に起因し、かつて自明であった意味や価値はその自明性を失い、人間の孤立化が進行し、心身の失調が遍在化してきている。これこそがメンタルヘルスの危機であり、これを超えるためにカウンセリングやセラピーが求められている」とし、「かつてのフロイトのような個人内部の真理の探求ではなく、クライエントとの『共感・出会い』を中心理念に転換すべきだ、それが全世界で起こりつつある伝統的共同体の崩壊に即したカウンセリング・セラピーの側からの対処行動である。」としている（森山公夫 2001)。

『共感・出会い』はしかし、人間世界や特に臨床心理学の世界にとっては古くて新しいテーマである。先に見てきたように、強固な社会構造の下で変容を迫られていた弱小な個人という図式はなくなった。「人格者」という言葉が今や死語になったように、古典的な意味での自我の成長概念は難しい。

多様な価値を許容するこの社会の中で、個人も周囲も相互の引力を持ってその貌を刻々と変えるのである。それは個人が個人として生きられる歴史上初めての自由を保証するものかもしれない。しかし他者への基本的信頼感や、それによる共感能力を身につけることに失敗している人間にとっては、この現代の自由性は戸惑いの空間に投げ出されることでもある。わが国で急速な普及を見せた携帯電話も、どんなに社会が拡散しても、友人という狭い共同体へのつながり・所属感情を確認しあっていると見ることも出来るし、現実に「ケータイ依存症」とでも言うべき事例も存在する。

急速な社会変化で現在見失っているように見えるもの、それは当然のようであるが幼児期から終生綿々と続いて必要なはずの「人が人を育てる」環境ではあるまいか。児童虐待の問題にもそれは端的に表れている。かつての家庭中心ではなくなり、その機能が衰弱した今、個人の心理面を支える社会的ネットワークが必要かもしれない。未経験な母親が幼児を抱えて誰も相談相手を持たない問題と同様に、引きこもり青年にとって心理カウンセラーとの時間だけが人との会話であるとは、社会として尋常な『共感・出会い』の場の提供とは言えない。社会に共同体性がなくなり、一方で生物学的な生存の保証と快楽と利便性の提供装置だけは突出しているこの現代社会で、内的葛藤を失いつつある臨床事例は、この時代にあっての人間精神の危機を物語っていると見えるのである。

（なお事例については秘匿性保持のため本質を変えない範囲で事実を一部変更した。）

参考文献

牛島定信（1988）境界例の概念とその変遷『現代精神医学体系』中山書店

Erikson, E. H (1959) Identity and The Life Cycle (小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房 1973)
小此木啓吾 (1971)『現代精神分析 1・2』誠信書房
小田　晋 (1986)『社会病理診断』中央公論社
同　(2000) 文化と精神障害『精神科治療学』15 (12)
影山任佐 (1999)『空虚な自己の時代』日本放送出版協会
同　(2000) 現代日本の犯罪と現代社会：自己確認型犯罪『精神科治療学』15 (12)
上林靖子 (1990) 不登校と非行『社会精神医学』13 (1)
高良武久 (1988)『高良武久著作集 II　森田療法』白楊社
清永賢二 (1998)『少年非行の世界』有斐閣
千石　保 (1991)『「まじめ」の崩壊――平成日本の若者たち――』サイマル出版
中西信男 (1991)『コフートの心理療法』ナカニシヤ出版
西園昌久 (1983) 対人恐怖と手首自傷『青年の精神病理 3』弘文堂
西田博文 (1976) 現代社会と青年期の神経症的病理『青年の精神病理 1』弘文堂)
松木邦裕 (1998) 精神分析的精神療法の最近の病態に対する適応『臨床精神医学』27 (8)
A, Mitscherlich (1963) Auf dem Weg zur Vaterlosen gesellschaft: Ideen zur Sozialpsychologie (小宮山　稔訳『父親なき社会』新泉社 1972)
C, Rasch (1979) The Culture of Narcissism-American Life in an Age of Diminishing Expectations (石川　弘義訳『ナルシシズムの時代』ナツメ社 1981
間宮充幸 (1997)『若者犯罪の社会文化史』有斐閣
森山公夫 (2001) 精神療法理念の基本的転換『精神医療』23 (9)
安香　宏 (1990) 現代社会と青少年の行動『社会精神医学』13 (1)
安永　浩 (1970) 境界例の背景『精神医学』12 (6)
山田和夫 (1989) 境界例の周辺『精神療法』15 (4)
D, Riesman (1950) The Lonely Clowd (加藤秀俊訳『孤独な群集』みすず書房 1964)